

「また這入つて来たは」

「オイ、お糸」

「旦那さん」

「旦那さんやない、俺が鯛を食ふので魚喜に持つて這入らしたんや、俺は全體此處の何や」

「貴郎はんは、御主人でござります」

「主人やナ、まさか奉公人やないナ、其の俺が食ふのに食はさんのか、俺の口をひじめるのんか」

「イエそうやござりません。貴郎はんは御存じござりまへんが、今日は先の佛の精進日でござりますので生臭い物がチラバルと嫌でござりますので、左様に申しました」

「ナニ先の佛の精進日と誰が極めた、先の佛、先の佛と云ふが、先の佛に何程恩が有るね、身代は潰ぶされて、磯屋裏の奥の端で欠けた行平でお粥を啜つたんは皆、先の佛のおかげやないか、頭の毛が抜けて鶏の尻みたいに成つたん忘れたのか、米の飯がてつぺエ登つてると言ふのは貴様の事ぢや奴すべた奴」

「何も其様に他人さんの前で、妾の耻を云はいても宜しいがな、妾の方から来て呉れと云ふた譯やなし、貴郎の方から酔狂で養子にお越しなはつたのに」

「ナニオ、洒落た事を吐したな生意氣な」

「サア、何うなとしなされ」

「オウ……して遣らいでかい」

「モシ旦那そんな事をしたらいかん、お家危あやな険い、一寸何誰ぞ來とくなアレ、痛い、是は私の頭や、お店のお方、私の荷を見てとくなアレ、赤犬が來てる、それ鱒を唾よへて行たがな……モシお家、貴女もいかん、あんまり先の佛、先の佛と言ふ依つてに、今の佛の氣に障つたんや」

「何が今の佛や」

「そうや、まだ佛になつてエへんね」

「今日は休みや、店の者表を閉めて仕舞へ」

鶴の一聲、バタ／＼と店を片附けて仕舞ました。

「魚喜、濱の有る魚買ふて來い」

魚喜はどん／＼肴を運びます。そうなるとお家も負ぬ氣で、

「お清、横町の八百善へ行って直ぐに來て貰ふとくれ」

女中が飛出しますと、八百善が参りました。

「お家今日は」

「オ、八百善さんか、精進料理百人前早速拵へとくれ」